



まちしるべ80

西光院

所在地 宮代町字東

西光院は、百間山光福寺西光院と号し、新義真言宗智山派（総本山智積院）の寺院で、以前は真言宗慈猛流の鶏足寺（栃木県足利市）や当山派修験の醍醐寺三宝院（京都市）の末寺であった。

西光院は、奈良時代に行基により創建されたと伝えられ、平安時代末期の安元二年（一一七六）には、国指定重要文化財の阿弥陀三尊像が造られ、室町時代の長禄二年（一四五八）には、その阿弥陀三尊像が修理されたことが、台座の連弁や胎内墨書から明らかとなっている。昭和二十七年（一九五二）に焼失した阿弥陀堂はこの三尊像が納められていたもので、同じく焼失した四足門と共に室町時代の建立と伝えられる。

岩付太田氏や後北条氏が岩付城を支配するようになると、西光院はその支配下となったようで、北条康成や北条氏房の書状や判物が残される。

江戸時代には、その末寺や門徒を合わせて二十七か寺を数え、本地域における新義真言宗の中心的寺院であった。総門跡は西神外と東神外にあり、榎二本が植えられていた。西光院付近には、阿弥陀堂や鐘楼、五社神社、東光院、池ノ坊、大蔵坊、大善坊、明積坊、不動坊、東照宮、雷電社などがあった。

徳川将軍家からは、寺領として五十石が寄進され、歴代将軍の朱印状十二通や御朱印箱が残される。この他、西光院東照宮の御神体であった絹本着色徳川家康画像や「栗田口」の刻印がある栗田口焼葵紋茶碗なども残されており、智積院第三世を務めた西光院第二世の日誉の頃、将軍家から拝領したと伝わる。



国指定重要文化財 阿弥陀三尊像



町指定文化財
栗田口焼葵紋茶碗

「栗田口」
刻印



町指定文化財
絹本着色徳川家康画像



五街道其外分間絵図並見取絵図 日光道中間延絵図
西光院付近 Image:TNM Image Archives



この案内板は、宮代町の歴史や文化財を後世に伝えたいという思いによる寄付等（ふるさと納税）により建てられたものです。

宮代町